

●平成二十三年度
第九回一日研修旅行

国宝茶室待庵と燈心亭、八幡市立松花堂庭園・美術館見学
日時・平成二十四年二月二十一日
訪問先・妙喜庵待庵、
水無瀬神宮燈心亭、
八幡市立松花堂庭園・美術館
参加者・三〇名
講師・飯島照仁氏

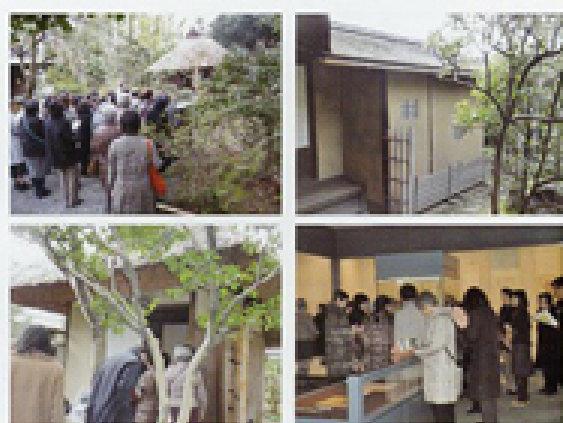


平成二十二年年度の研修旅行の際に、如庵の次は待庵を見学したいとのご希望が寄せられました。そこで、その実現に向けて交渉した結果、本来十名程度の規模でしか受入れられていないところを、特別に三〇名まで受け入れていただけることになりました。それでも、百名を超える応募があり、厳正なる抽選の結果参加

者を決定いたしました。

当日は、茶道資料館研究員で建築家でもある飯島照仁氏を講師に、国宝茶室妙喜庵待庵、水無瀬神宮の重要文化財茶室燈心亭、八幡市立松花堂庭園の重要文化財松花堂の三か所を中心に、見学いたしました。待庵と燈心亭・松花堂は、内部に入ることは出来ませんが、外からの見学となりましたが、飯島氏が見所を丁寧に説明してくださいました。松花堂美術館では、開催中の展覧会を学芸員の川畑薫氏の解説で鑑賞しました。

茶室についての解説は、飯島氏にご執筆いただきましたのでご参照下さい。



待庵の茶の湯空間

飯島照仁

妙喜庵は東福寺の末寺で、室町時代の書院造りである「対月庵」や広間の茶室「明月堂」、利休の造作と伝える「待庵」を主たる建物とするひとつそりとしたお寺である。

国宝の待庵は天正十年（一五八二）頃、山崎合戦の際、秀吉が利休に命じて造作させたという説、利休屋敷からの移築という説、山崎城内にあつた茶室の移築という説など諸説がある。また秀吉が山崎で滞在したのは妙喜庵ではなく、その北方天王山の宝寺であり、戦後秀吉が山崎で行つた茶会もこの宝寺の中であつたという。このことは、慶長十一年（一六〇六）に片桐且元が作つたといわれる『宝積寺絵図』に「天正年中、秀吉公、当山宝寺城郭を為す一中略一右天正十年十一月一日より四日迄、当山在宿。秀吉公、本堂後の巖下に杉の庵をかまえ、四日の朝数寄、四使に手前にてお茶を給ふ。其跡今にあり」と記載されている。この『宝積寺絵図』には「妙喜庵」「かこひ」、秀吉が衣の袖を摺つたという「袖摺松」も記されており、現在

は三代目の松が歴史を伝えている。またこの袖摺松由来の老松茶器はとも有名である。

待庵の外観は切妻屋根の柿葺であり、土庇を備えている。敷石と飛石をすすむと、茶室の前に「芝山」と称する手水鉢がある。この手水鉢は、時代とともに異なつた形状の手水鉢が据えられていた時期もあり、現在の手水鉢は江戸時代に太閤石で作られたものとされている。

土庇下の飛石を更に少しすすむと待庵の正面に位置する。ここでは開口や連子窓、下地窓など外観の見どころがたくさんある。

先ず開口であるが、待庵の開口は一般的な開口よりも大きいのが特徴である。現代では開口の標準的な寸法は高さ二尺三寸（六九・七センチメートル）、幅二尺二寸（六六・七センチメートル）くらいであるが、待庵の開口の寸法は高さ二尺六寸（七八・九センチメートル）、幅二尺三寸七分（七一・八センチメートル）と高さ・幅ともに一回り大きい。実

際に待庵の開口の前で開口の板戸を開けてみると、見た目以上に開口部の大きいことが実感できる。このことは待庵の開口が茶室の開口として初期的な試みとして設けられたことを窺わせるものである。



開口の上には竹連子窓が配置されている。待庵の連子窓は九本の竹連子からなるが、窓の中ほどに「あふち貫」が付けられていない。竹連子窓は一般的に「あふち貫」が竹連子の内側中ほどに添わせて設けられているが、待庵の連子窓には付けられていないのである。これも野趣に富んだ簡素な連子窓の初期的な試みと考えられる。

また待庵の下地窓は、下地を塗り残した古式の姿を伝える下地窓であり、葦と割竹の下地が窓の部分だけ

でなく壁面の下地として組み込まれている。下地窓は、現代の施工では窓の部分のみ意匠化され、壁下地窓として造作されることがほとんどである。しかし待庵の下地窓は、本来の壁下地窓の姿を確認できる初期的な実例として唯一の遺構である。

さて、いよいよ開口から待庵の内部を拝見する。待庵は二畳間の空間である。開口の板戸を開けると、奥行きを感じさせる任じた土壁の床の間が正面に現れる。待庵の床の間は、床の内部が側壁から天井まで丸みを帯びて塗り廻された「室床」の形式である。床天井の高さは五尺二寸（一五七・六センチメートル）で、利体が最も低い寸法を好んでいた時期のものと考えられている。床柱は杉（北山）丸太で見付（正面）の高い位置までやさしく面付けがされ、大変珍しい。床柱は桐の丸太で、正面に大きな節が調子よく三つあるのが特徴的である。落し掛けは床柱側に少し丸味を残した杉材を使い、相手柱も面付けの杉丸太が用いられている。

開口の上の土壁は床の内部と同様に丸味を持たせた塗り廻しとなっている。これは床内と合わせて三本の柱を土壁で隠すことにより、茶席の限りなく奥行きを醸し出している。また茶席内部の土壁は「わび」の意匠ともいえるスサ入りの荒壁によっ



て仕上げられている。

待庵の炉は隔炉に切られているが少し小振りである。一般的な炉が一尺四寸（四二・四センチメートル）であるのに対し、一尺三寸四分（四〇・六センチメートル）とやや小さく、小板は入れられていない。そして天井は竿縁天井二枚と掛込天井の組合せとなっており、二畳の間とは思えぬほど変化に富んだ空間構成である。待庵は、この天井の意匠と壁面の塗り廻しが調和して空間の拡がりを感じさせている。

二畳に続く次の間には八寸ほどの側板が入れてあり、釣棚が仕付けられている。幅二尺の入口や道

柱が施されており、吟味を重ねた中柱を想像させる。待庵は二畳であるが、次の間と併せて三畳の茶の湯をも連想させる空間構成となっている。待庵は茶室の本質をとらえた意匠と茶の湯の空間として、限らない可能性を示唆している。そして何よりも、待庵はわび茶の心を現代に伝えていく空間であり、何度訪れてもそのたびに新しい発見がある。

具の運び出し、点前座の位置の決定など、使い勝手から板畳が入れられているものと推測される。また茶道口は通口の構成となっており、二枚の太鼓襖が入れられている。この襖を取り外すと、戸当りにナグリの化

